

前回、〈貧しい人々〉とは「犠牲を強いられながらも敬虔な人々」という宗教的な意味合いもあるということ。また、ミツが復活病院に戻ったのは、彼女と病棟の〈みんな〉がお互いの《賜物》を分かち合うためなのだとということを書きました。きょうはその補足と、わたしが《賜物》をいただいた話を読んでいただきます。そして、『わたしが・棄てた・女』の最終章に進みたいと思います。

《賜物》とは

《賜物》とは、『①（神仏などから）頂いたもの。賜ったもの。②苦労や努力の結果として生じたもの。』（『大辞泉』）という意味があります。ここでは、もちろん①です。自分に〈いのち〉を与えてくださった神さまからいただいたもの — ということです。

学問や運動の能力、職人と呼ばれるような技術、芸能における才能 … そんな、ほかの人より特別な力を与えられた人たちがいます。彼らがその能力を発揮することで、私たちを感動させ、生きていく勇気やヤル気を与えてくれることがたびたびあります。もちろん、血のにじむような努力や鍛錬をした結果です。それに加えて、生まれた時代・家庭・環境・運 … など、〈与えられたもの〉が重なって、その人生の場が設定されたと言えるでしょう。それを〈与えてくださった存在〉を、私たちキリスト者は〈神〉と呼んでいます。

では、そうした特別な能力を与えられなかった多くの人たちは、《賜物》をいただけなかったのでしょうか？ いえいえ、そうではありません！ — と、前回ご紹介したパニエ師がおっしゃっていました。（もう一度、お読みください。）

『貧しい人々は、私たちを富ませることができます。飢えた人々は、私たちを満たすことができます。傷ついた人々は、私たちの心の破れを繕い、私たちを癒すことができます』と。

弱く、貧しく、小さな存在である私たちが生きていくには、ほかの人たちの《賜物》で自分に足りないものを補ってもらう必要があります。ほかの人たちも私をもつ《賜物》を望んでいるのです。お互いが神さまからいただいたものを分かち合うことによって、私たちは生き、生かされているのです。そのことをわたしは自分の人生のある時、経験しました。それを少し書きます。

《ある少年との出会い》

わたしが洗礼を受けたのは、2002年3月30日でした。神さまはなんと、51歳9か月19日という月日を用いて、私に「弟子入り」をおゆるしになりました。

19歳の時、遠藤周作氏の『沈黙』を読んだのがキリスト教との初めての出会いでした。その後、第3回でご紹介した杉山好先生に会い「無教会主義」キリスト教を学び、結婚式では司式をしていただきました。しかし、就職してから土・日、祝日もほとんど仕事や部活動に追われ、月に1度、東京・中野で行われる集会に出られず、信仰が熟すこと

はありませんでした。

ある県立養護学校に勤務した3年目。今から考えると運命的な出会いが待っていました。重度の知的ハンディキャップがある高校1年生を、女性の先生と一緒に担任することになりました。男子1人、女子2人のクラスです。わたしはおもに男子生徒D君を担当しました。(この3人の生徒と2人の担任の組み合わせは、3年間続きました。)

D君は、「基本的日常生活習慣」がまだ十分に身につけていない生徒でした。ことばは「オウム返し」が多く、私たちは彼が何を言いたいのか、何をやりたいのかを表情や動作で判断しなくてはなりません。学生服から作業服に着替える時も、最初は全介助に近い状態でした。同級生と一緒に行動することもなかなかできませんでした。「D君ができることを、ひとつでもふやそう」、「D君が学校に来るのを楽しみにするような毎日にしよう」というのが私たち担任の指導目標だったと思います。

D君の心身の成長に合わせた小さなステップを設定し、何かできるようになったら一緒によろこぶ日々でした。でも、なかなか言うことを聞いてくれないD君にイライラしたり、叱ったりしたこともありました。そのたびに〈弱くて、もろい自分〉を感じました。バニエ師のことばを借りれば、「自分がいかに貧しいか」を知ったといえます。

《子供たちの「単純な信頼」がもたらすもの》

上智大学の夏期神学講習会でお話を聞く機会が数回あった武田なほみ先生が、次のような文を書いておられます。

祖父母と孫が楽しそうに過ごしている姿はとても微笑ましく、気難しくみえたおじいさんが、『幼子に「じいじ」などと呼ばれて相手を崩していたりすると、子どもたちが持つ、人の心を開く力の大きさに感服する』。なぜ子どもたちが大人の心を開いてくれるのでしょうか。武田氏は『…先入観なしに、子どもたちは初めから相手に受け入れられることを前提としているかのように、単純な信頼をもって相手に近づいていく。子どもたちがそのように心を開いてくれる』からだといいます。そして大人は『いつの間にか身に付けてしまった固い殻を瞬時に溶かされて、自然に、表情にも物腰にもその人本来の柔らかさと、人と出会う喜びを取り戻す恵みにあずかることになる』のです。

土・日を除いて、孫たちの面倒を見る時間が1日の大半を占めるようになったわたしの毎日。武田先生の文は、まさに的を得ています。そうなんです。同居人とささいな事で口げんかした朝でも、孫たちの笑顔を見ているとそんなことはすっかり忘れて、楽しい1日になります。孫たちの〈単純な信頼〉が、きょうという与えられた1日に出会う人たちを大切にすることや、その喜びに感謝することを教えてくれるのです。

《こころの固い「壁」を溶かす「ほほえみ」》

D君との出会いは、それまで決断できなかった《洗礼》にわたしを導いてくれました。2008年の夏期神学講習会終了後のレポートの中で、わたしは次のように書きました。

『私は6年前、51歳で受洗した。それを導いてくれたのは重度の知的ハンディがある高校生だった。(中略) 3年間一緒に過ごすうちに、彼の瞳が「センセ、学校にいるときはあなたが頼りなんだよ。」と訴えていることに気がついた。ジョギングをす

る時つなぐ手が、「いつも一緒にいてくれて、ありがとう」と語っている声を耳にした。
(中略) 私と彼の出会いは、神がもたらしてくれた恵みだった。読み書き・計算はできない。言葉も少ない。しかし神は、その「小さき者」を通してその臨在を私に示してくださった。弱く、ほとんど何も持たない彼を用いて、私を信仰に導いてくださった。神は彼に、〈この世的な〉名誉も、地位も与えられなかった。しかし、《誰の心も和ませてくれる微笑み》をお与えになった。それは、お金万能・能力重視・強者優先などの現代社会の価値観からすれば、なんの価値もなく見向きもされないものだろう。しかし、「微笑むだけで人の心を開かせてくれる人間」がどれだけいるだろうか？ 神がその姿を、その愛を、そして一人ひとりの人間のかけがえのなさを私たちに示すのに用いてくださるひとりの人間として、彼は「選ばれた」のだ。』(一部訂正・加筆)

D君の〈ほほえみ〉は、孫たちが私に見せてくれるものとまったく同じでした。どんなにつらいことやおもしろくないことがあっても、それを一瞬のうちに消してくれました。それどころか、彼が神さまにいただいた〈ほほえみ〉という〈賜物〉は、わたしに神の存在を確信させてくれたのです！ 人生の中での、もっとも大きな決断をもたらしてくれたのです。

人と人の交わりについて、バニエ師は言います。『交わりとは、相手を喜んで迎え入れることであり、相手が私のために心を解放してくれることに感謝し、私もまた、その人のために自分の心を捧げることです。それが真の交わりであり、愛の交流と言えるものです』。また、『誰かを愛することは、その人のために何かをしてあげるのではなく、その人の価値を明らかにすることです』と。

私たちは、お互いの〈賜物〉を分かち合いながら生かされていくことで、生きるこの意味がわかってくるのではないのでしょうか。毎日の生活の中で与えられる素朴な出会いに心を開きながら。

『ぼくの手記(七)』 (p.236~255)

さて、いよいよこの物語も最終章に入ります。ミツは雑用係として病院で働くことを認められました。『あれほど嫌悪をもって眺めたこの風景がミツには今、自分の故郷に戻ったような懐かしさを』感じながら、新しい人生を歩み始めます。

一方、吉岡はマリ子と結婚式を挙げました。社長の姪と結婚した吉岡への『うまく、泳ぎやがって』という同僚の妬みを感じながらも、『現代における愛情にはエゴイズムを抜きにして考えるのは不可能だ。エゴイズムという言葉がわるければ、それは幸福になる欲望といたっていい。ぼくが「うまく泳ぐ」ことは、とりもなおさずマリ子の将来の幸福のためでもある — そう考えて、どうしていけないのだろう』と思う吉岡でした。

新婚旅行はマリ子の提案で、社員旅行で行った山中湖周辺でした。そこで吉岡の胸によみがえったミツの顔…。その後、一通の手紙が彼に届きます。次号まで。

- 【引用・参考にした書籍、レポート】
- ・ 遠藤周作 『わたしが・棄てた・女』
 - ・ 武田なほみ 『人をつなぐ神の知恵 第13回 老いの孤独と希望』(『福音宣教』2014年2月号, オリエンス宗教研究所)
 - ・ ジャン バニエ 『小さき者からの光』(あめんどう, 2001)
 - ・ 峰岸克樹 『失うものがないからこそ、すべてを与えられる…』(上智大学夏期神学講習会レポート, 2008)